

『どこかの誰か』

室市雅則

3,788 文字

あらすじ

全てを諦めると、足が南へと向いた。
降り立ったのは JR 西日本最南端の駅。
駅舎もない駅の周りには畑と海。
御誂え向きだと海へと足を進める。

上手くいかない。

何もかも全部。

『全部』なんて大雑把だと思われるかもしれないが、本当にそうなのだ。

例えば、この前のこと。

正味の数字を書いた見積もりを取引先に送ってしまった。結構な利益を目論んでいたのに、結局、ギリギリの数字での取引となってしまった。社会人を干支一周くらいやっておきながらのイージミス。上司からはコテンパンにやられ、人格どころか両親まで否定されたので、思わず手を出してしまった。

会社をクビになった。

両親はすでに他界し、兄弟も親戚もいない三十代半ばの独身男。仕事を失ったから、さらに『無職』のステイタスが追加された。

やけ酒を飲んで酔ってフラフラしていたら、若い兄ちゃんとぶつかって、ケンカになって最終的にはゴミ捨て場にぶん投げられて、全身がドロドロになって、バナナの皮が頭にぶら下がって、情けなくなって泣いた。

徹底的にダメだ。

思い返せば、始まりから上手くいっていない。

まず顔が良くない。

平安貴族みたいな眉に糸のように細い目、漢字の「山」が張り付いただけの低い鼻。

生まれた瞬間から、そのいい加減な顔の作りに両親さえも笑ったらしい。

外見だけではない。

自分で言うのも何だが中身も良くない。

怠け者、ケチ、小心者。

その一端は掃除の仕方に現れていると思う。

まず怠け者だから、両親が残してくれた家も散らかりきっている。

次に、ケチだからゴミを出す有料の袋を買いたくない。だから、たまにコンビニに捨てに行くのだけれど、店員や他の客に見られて咎められるのが怖くて、深夜にコソコソしている。そうならば、何かを買えば、ちゃらになるんじゃないかとも思うが、勿体無いから何も買わない。

こんな男に誰が好意を持つだろう。

将来への夢も希望も無い。

生きている意味なんてないんじゃないか。終わろうよ。

そう抱くと不思議なもので、南に行こうと思ひ浮かんだ

演歌であれば北へ向かうのだろうけど、気分は九州に向いていた。

暖かい土地で、現地の人の温もりに触れたかったり、自分を探したいわけではない。よく分からないが、きっと祖父母が九州出身だから、そのせいかもしれない。

飛行機で一路、鹿児島へ。

チケット代はクレジットカードで支払いをした。

申し訳ないけど、引き落としは残高不足で履行されないだろう。女性乗務員が飲み物を勧めてくれたが、喉が渴いていなかったので断った。

空港からはバスに乗って鹿児島空港へ。

初めての土地なので目には新鮮なのだが、視界に入るだけ以上のものを感じない。

心が真っ平ら。そんな感じ。

それでも鹿児島中央駅に着くと腹が減った気がした。体は別思考のようだ。

改札の上の時計を見ると昼過ぎ。

食堂街へと歩いて行く。最初に目についたのは、どこにでもあるチェーンの喫茶店。店を探すのが面倒なので、そこに入った。鹿児島までやってきてもさすがチェーンで、全く鹿児島を感じさせない内装。一体、ここはどこだろう。ホットドッグの味はしなかった。

このまま街に出ようかと思ったが、気乗りがしない。人が多い所は嫌だ。

誰もいなくて、寂しい所が良い。

適当に切符を買って、適当なホームに向かって、適当に電車に乗った。

整然と並んだビルや家が窓の外で流れる。

どこに行っても似たような景色。悪くないと思う。でも今の気分には合わない。

電車が進んでいくと畑が一面に広がった。

おじさんがトラクターで耕している。土が混ぜ返っている。

きっとあんなグチャグチャしたものを求めているのかもしれない。

しばらくすると眺めは海になった。

見つめる。

こんな静かな所で終えるのが良いんじゃないだろうか。

そう思うとちょうど電車が駅に着いたので、どこかも確認をせずに降りた。

『西大山』駅であった。

駅舎もなく、周りを見渡すと富士山のような形の山と道標が見えた。

そこには『JR 日本最南端の駅』と記されている。『最南端』に『西』が付くとはややこしいなと思いつつ、無人改札を抜ける。プレハブ小屋の観光案内所と漬物屋が並んでいるが、人は誰もいない。

周辺地図で海への道のりを確認すると岬に『龍宮神社』と『浦島太郎像』とあると記されていた。

一瞬、そそられたがきっとその手の場所は人が多いからダメだ。

そのまま近くの海岸へと向かうことにした。

歩みを進めても、畑と電柱しかない。

土が風で舞う。

良い感じだ。

電柱がなくなり、新顔として登場したのは一本のカーブミラー。

しょぼくれて歩く姿が映ただろう。

ひたすら歩いていると生意気にも額に汗が滲んだ。

シャツの裾で拭いていると軽自動車が向こうからやってきた。

一本道は、やっと一台が通れるような幅なので脇に避けて待っていると運転をしている女性が麦わら帽子のつばを少しあげ、会釈をして通り過ぎた。

もしかしたら、この人が最後に見る人かもしれない。美人だったから良かった。

まばらに家が建つ住宅地と神社を抜け、私道らしき小道に無断で侵入して、突き抜けると海に辿り着いた。

普通の海。ただゴミは落ちていないので、嫌な気分にはならない。ちょうど良い。

飛び込むような崖はない。泳ぎが得意ではないので、沖に向かえば何とかなるだろう。

周りに人がいないことを確認し、浜辺に下りる。

乾燥した砂が早速靴に入り込んだ。

数歩進んだところで、緊張からか催してきた。海に入って放出しようかとも思うが、最後くらい地上でスッキリさせたい。贅沢だけど。こんな所にトイレがあるわけがないだろうなと思いつつも左右を見渡すと百メートルくらい先にそれらしき建物が見えた。

砂を靴の中で感じながら、そこまで歩くと見事に正解で公衆トイレであった。

打ちっ放しのコンクリートが所々欠けていて、まさに海辺の公衆トイレという感じ。

久しぶりにこういったトイレをお目にかかり懐かしかった。

きっと『小』の方は水洗どころか仕切りもなく、壁に向かってするタイプ。

『大』はポットンかもしれない。

それでいて換気が悪いから臭いが最悪なタイプ。

最後のトイレにはぴったりだ。

鼻が曲がることを覚悟して、中に入った。

啞然とした。

めちゃくちゃ綺麗だった。

作りが古いのは否めないが清潔なのだ。

『小』は蛇口を回すタイプの便器がきちんと三つ並んでいる。

『大』は二つの個室で、ちゃんと水洗だ。

清々しく用を足せる。

チャックを降ろし、小便器の前に立つと張り紙が目に入る。

『一步前へ。トイレも人生も(余計なお世話だね)』

居酒屋で筆書きのヘタウマを気取ったようなものあれば、唾を吐いてやりたい所であったが、女性特有の丸文字の『余計なお世話だね』の一言で許せるし、逆に真実味がある。

本当に『一步前へ』踏み出して、小をした。

気持ち良かった。

チャックを戻し、水を流して、洗面台に向かう。

ここも綺麗だった。

黄色い花が一輪活けられている。

手を洗い、蛇口を戻す。

濡れた手をシャツで拭き、再びトイレを見渡すと床にハンカチが落ちている。

拾って広げると猫が転がっている柄に『ネコろがる』と書かれている。

笑ってしまった。

まだ笑えるのか。

驚いた。

波の音が聞こえ始めた。

それにしても、いつ誰が使うとも知れないトイレを何故、こんなにも綺麗に保っているのだろう。不思議だ。しかし、確実に誰かが行なっているのだ。そして、そのおかげで一步踏み出そうかなと思ったし、笑えた。

とりあえずもう止しにしよう。

どこかの誰かが、手を差し伸べてくれたのだから。

ハンカチを片手にトイレから出た。

先ほどと同じ海だが、心なしか綺麗に見える。

誰かは、目の前の波のように、当たり前のように、ここを掃除している気がする。きっとそれは、このハンカチの持ち主だろう。だって、清潔さは嫌味がないし、『余計なお世話だね』と『ネコろがる』が通じているから。

待っていればまた掃除をしにくるかもしれない。

もしかしたら、ハンカチを忘れたことに気付いて取りに戻ってくるかもしれない。

砂を踏みしめる足音が聞こえる。

「あの、すみません」

声が出た方を向くと、先ほどすれ違った麦わら帽子の女性であった。

肩にかかる黒い髪が風でそよいでいる。

ノースリーブから伸びる腕は日焼けしていてこげ茶の肌が健康的だ。

細い指先でハンカチを指差している。

「ああ、すみません」

手を伸ばして、ハンカチを差し出す。

「ありがとうございます」

女性はそう言って、先ほどのように麦わら帽子のつばを少しあげて会釈をし、笑顔を浮かべて受け取った。

最後じゃなかった。始まりだった。

「こちらこそ、ありがとうございます」

そう言って頭をさげると女性は不思議そうに一瞬だけ首を傾げると、再び笑顔を浮かべ、再び小さく会釈をして踵を返した。

先ほど浮かんだ疑問を尋ねる間も無く、砂を踏む音が遠くなって、女性は消えていった。

海が青い。波が白い。暑い。喉が渴いた。

トイレに戻って、洗面台で蛇口を捻った。

勢いよく水が出てきた。

そこに頭から突っ込んで、顔面を滴る水をそのまま飲んだ。

全身に水が染み渡るのが分かった。

どこかの誰かが、どこかの誰かのためにやっている。いや、そんな打算もないかもしれない。ただこうやって水を飲むみたいなことかもしれない。

理由なんてどうでもいいか。

ただここにあることが全て。

最南端の駅の近くの誰も来ないような海辺のトイレが美しい。

ただそれだけのこと。

それだけのことに動かされた人間がいるだけのこと。

蛇口を閉めて、顔を上げる。

洗面台が水浸し。

シャツを脱いで、洗面台を拭き上げた。

(了)